



◎勤労青年たちが教師を招いて開校した夜間中学講習会が前身。校訓は「好学・自治・協力・質実・奉仕」。2004年に現在地に移転、07年に中学校を併設した。15年度、新潟県魅力ある私立高等学校づくり支援事業「国際人材の育成」の指定を受ける。

設立	1921(大正10)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約420人
2015年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、新潟大、名古屋大、京都大、新潟県立大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ650人が合格。
住所	〒950-0116 新潟県新潟市江南区北山1037
電話	025-257-2131
Web Site	http://www.niigata-meikun.ed.jp/

新潟県・私立
新潟明訓中学・高校

進学実績向上

基礎・基本の定着と 上位層への意識喚起で 全生徒の力を伸ばす

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎自由な校風を重んじて、学習面も生徒の自主性に任せていた。その結果、成績上位層の生徒を伸ばし切れなかった</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎宿題と連動した朝テスト、家庭学習時間調査で、家庭学習習慣と基礎の定着を図る。グローバル教育などにより、進路意識を喚起</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎東京大・京都大を始めとする難関国公立大の志望者・合格者が増加。生徒が更に上の目標を目指すように</p> <p>STEP 3</p>
--	---	--

**生徒の学力・気質の変化に応じ
指導の転換を決意**

新潟市内にある私立新潟明訓中学・高校は、ここ十数年で急速に進学実績を伸ばしている。2004年に現在地に移転後、国公立大合格者はそれまでの70人前後から160人を超えるまでになり、医学部医学科合格者も輩出。中高一貫クラス1期生卒業時の13年には、東京大3人、京都大1人の現役合格者が出た。その背景には「生徒の力を伸ばし切れなかったのではないか」という教師の思いに端を発した学校改革があった。進路指導部長の坂田義史先生はこう話す。

「生徒のほぼ全員が大学進学を希望し、うち8〜9割が国公立大志望者です。しかし、改革以前の国公立大合格者数は、1学年の2割程でした。当時の本校は自由な校風が特徴で、生徒の学校への満足度が高い反面、学習面については生徒の自主性に任せ過ぎる傾向がありました。そのため、生徒の力を伸ばし切れなかったのです」

移転前は伝統ある私立高校として、県内でも成績上位層の生徒が入学してきた。ところが、郊外に移転後は、市の中心部へ通学を希望する層が受験を回避するようになり、08年に公立高校が全県一区となったからは、更に入学者の学力層が変化していった。生徒の気質も変わったと、進路指導副部長の寺澤琢磨先生は指摘する。

「以前の生徒には、難問にも自ら食らい付く力強さがありました。08年以降は、素直で言うことをよく聞く一方、受け身の姿勢が目立つようになりました。上を目指そうとする欲がなく、自ら学習しようとしないうえに、基礎・基本がなかなか身に付かず、難問を解く楽しさもあまり感じていないようでした」
 そのような状況を受けて、潜在能力のある生徒の主体性を引き出し、上を目指す気概を持たせられるよう、教師が手を掛ける指導への転換が図られた。



新潟明訓中学・高校校長
大滝祐幸 おおたき・ひろゆき
 教職歴42年。同校に赴任して4年目。「生徒は学ぶ目的と目標を求めている。倫理性の高い目的と目標を手にした生徒は自分の力で歩き始める」



新潟明訓中学・高校
坂田義史 さかた・よしみ
 教職歴21年。同校に赴任して16年目。進路指導部長。「礼儀とけじめをしっかりと。ありがたう、ごめんなさいを素直に言える人に育てたい」



新潟明訓中学・高校
寺澤琢磨 てらさわ・たくま
 教職歴15年。同校に赴任して15年目。進路指導副部長。「ユーモアを忘れずに、生徒の笑顔と頑張りを引き出したい」



新潟明訓中学・高校
柴岡友洋 しはおか・ともひろ
 教職歴4年。同校に赴任して5年目。総務副部長。グローバル教育係長。「生徒の成長につながるよう、私自身も常に学び続ける」

朝テストを宿題と連動させ 家庭学習習慣と基礎の定着を促す

最も大きな課題は、家庭学習時間の不足だった。当時、生徒の1日の平均家庭学習時間は、1年生で1時間弱、3年生でも1.5時間程度であり、学習量の不足が入試結果に影響していることがうかがえた。

そこで実施したのが、1・2年生対象の朝テストだ。これは、毎朝SHR前の15分間に行う小テストで、国数英は週に1回ずつ、世界史・日本史・地理・物理・化学・生物は曜日によって選択させるという形式だ。問題は、前週の授業で学んだ内容を中心に出題。宿題にきちんと取り組めば得点できるテスト内容にして、生徒に家庭学習を促すことを狙いとした。得点は各教科の成績評定に加味し、得点が7割未満だった場合は、放課後の講習や課題の再提出などを義務付けた。そうした仕組みを構築し、基礎・基本の定着を図っていった。

更に、寺澤先生は担当教科の数学で、課題を提出していない生徒、朝テストで得点が7割未満だった生徒を対象に、週1回、放課後に質問会を開いている。

「効果的な学習方法の1つは、教師に質問し、出来るだけ早くつまづきを解決することです。教師に気軽に質問できる場を設け、日頃、課題を解けずに困っている生徒にこそ、

前向きに学習に取り組めるようになってほしいと考えています」(寺澤先生)

家庭学習時間などの客観データを 面談に生かし、きめ細かく指導

家庭学習時間調査も始めた。毎朝、SHRで前日に家で学習した教科とその学習時間を書かせ、生徒一人ひとりについて月ごとに集計。家庭学習時間と成績の相関を分析し、担任が面談などで学習アドバイスをする際に活用する。

「担任が最も注意しているのは、学習しているにもかかわらず、成果が表れていない生徒です。課題の提出状況や家庭学習時間などを総合的に見て、学習方法に問題がないかを探ります。つまづきが見つかれば、該当教科の担当教師に相談に行くように促し、学習方法の改善に結び付けています」(坂田先生)

面談週間は年3回あるが、大半の担任は必要に応じて、昼休みや放課後に随時面談を行っている。そうした学年団のフットワークの軽さも同校の強みだ。生徒からの学校評価アンケートの結果を見ると、「先生は私たちの意見をよく聞いてくれる」「先生は学習面で自分が努力したことを認めてくれる」などの項目がいずれも90%以上と高い割合を示している。教師が積極的に生徒にかかわっている表れだ。教師と生徒との距離の近さが信頼関係を生み、生徒が教師

の言葉にしっかり耳を傾ける姿勢が定着してきていることが、好循環を生んでいる。

上位層の生徒への指導を手厚くし 難関大を目指す生徒を育てる

国立大合格者が毎年3桁を超えるようになって、次の課題に挙げたのは難関国立大への合格だ。当時、旧帝大への進学実績は東北大のみで、東京大・京都大の志望者はいなかった。

「かつては、東京大や京都大の合格実績がなかったため、合格を狙える力がある生徒でも、東京大や京都大を現実的な目標として据えることが出来ていませんでした。高い目標や志を育み、更に上を目指す意欲を喚起する必要がありました」（坂田先生）

成績上位層の生徒を中学校段階で確保するために、07年度に中学校を併設した。中学校低学年時から難関大を目標にする意義を伝えることで、より高みを目指す雰囲気在校内に醸成していった。

難関大を目指す生徒の集団づくりも進めた。寺澤先生が担当した学年では、高校2年生から放課後に数学の特別講習「錬成会」を実施し、授業ではなかなか扱えない難易度の高い問題や、授業では触れる機会の少ない分野の問題を中心に演習に取り組ませた。これは、中入生・高入生のクラス別で実施。各40人程が参加した。

「朝テストや課題で生徒全体へのサポートは充実している反面、上位層の生徒への指導が手薄だったのが当時の課題でした。もちろん、基礎・基本の定着が先決ですが、それが出来ている生徒には、難問が解ける喜びや問題を解く楽しさを経験させ、意欲が高まることを期待しました」（寺澤先生）

海外研修で 諸外国の留学生と英語で討論

現在、同校が力を入れているグローバル教育にも、生徒が志を持った進路選択が出来るようにする狙いが込められている。12年度から同校のグローバル教育改革を主導している大滝祐幸校長は次のように語る。

「本校の方針は、大学進学後も力を発揮できる生徒を育てることです。世界に目を向けて自分の将来を思い描く過程で、自分がなぜ学ぶのか、なぜ大学に行くのかを考える。そのようにして内発的な学習意欲を喚起することで、更に上を目指すようになり、結果的に進学実績にもつながると考えています」

高校1年生の春休みには、アメリカ研修を実施。11日間、ボストンとニューヨークで語学研修や大学訪問、大学生との交流などを行う。定員は40人で、希望者の中から成績、英語力、志望動機などを総合して選抜する。

研修でのメインプログラムは、留学生対象の英語学校で行う語学研修だ。各自の英語力に合わせたクラスで、ヨーロッパやアジア、中東など、英語が母国語ではない留学生と一緒に授業を受ける。下のレベルのクラスは日常会話から学び、上のレベルのクラスでは英語で討論も行う。

生徒がカルチャーショックを受けるのは、諸外国の留学生のコミュニケーション能力の高さだ。総務副部長の柴岡友洋先生はこう言う。

「他国の留学生は、英語力がそれほど高くないでも積極的に発言します。本校の生徒は、筆記試験で高得点を取れても、彼らの積極性に圧倒されてしまい、なかなか議論に付いていきませんでした。それでも、最終日に近付くにつれ、会話のリズムをつかんで果敢に討論に加わろうとする姿が見られ、うれしく感じました。11日間で、彼らの表情や考え方がどんどん変わっていくのが分かりました」

「いながら留学」で なぜ、学ぶのかを考えさせる

学校にいながら海外研修と同様の経験が出来るように行おうのが、「エンパワーメントプログラム」だ。7月下旬に中学3年生は3日間、高校1・2年生は5日間、アメリカ・カリフォルニア大の学生や東京大の外国人留学生を招き、交流活動をする。中学3年生は全員、高校1・

2015年度「エンパワーメントプログラム」(高校生用)

	9:00-9:50	10:00-10:50	11:00-11:50	13:00-13:50	14:00-14:50
1日目	オープニングセレモニー	自己紹介	英語コミュニケーション力を高める活動(1)	スモールグループ・ディスカッション(1) テーマ: Positive thinking	
2日目	スモールグループ・ディスカッション(2) テーマ: My identity	英語コミュニケーション力を高める活動(2)	英語コミュニケーション力を高める活動(3)	プロジェクト(1) 学校環境により優しくなろう	
3日目	スモールグループ・ディスカッション(3) テーマ: Leadership	英語コミュニケーション力を高める活動(3)	プロジェクト(2) 高齢化社会について考える		
4日目	スモールグループ・ディスカッション(4) テーマ: Globalization	留学生のモデル・プレゼンテーション(夢とその実現のために努力していること)	プロジェクト(3) 世界で起こっている問題の解決策を考えて、具体的に行動を起こしてみよう		
5日目	スモールグループ・ディスカッション(5) テーマ: 自分の将来の目標	プレゼンテーションの準備	プレゼンテーション、クロージングセレモニー		

*学校資料を基に編集部で作成

2年生は選抜制で定員は130人。15年度は外国人留学生26人が同校を訪れ、同校の生徒5、6人のグループに外国人留学生が1人ずつ入り、ディスカッションやプレゼンテーションを行った(図)。

ディスカッションでは、「アイデンティティ」「リーダーシップ」などをテーマに自由に話し合い、プレゼンテーションでは、「学校環境」「高齢化社会」などのテーマについて課題や解決策を考え、グループごとにポスターや寸劇などの方法で成果を発表した。議論の進行は外国

若手教師が語る、指導変革への情熱

教育はチームプレイ
周りの先生との協力関係を築く

総務副部長 柴岡友洋

大学卒業後、外食チェーンの正社員として4年間働きました。店長として後輩社員やアルバイトに仕事を教えていく中で、人を育てる楽しさや素晴らしさを知り、人の成長を支える仕事を一生の仕事にしたいと考えようになりました。そして、社会人枠で大学に入り直し、高校の公民科、中学校の社会科、小学校の教員免許を取得して、念願の教師になりました。

本校に赴任してからは、試行錯誤の連続です。最も強く感じている課題は、志望校をなかなか決められない生徒が多いこと。生徒に直接話を聞かなければ分かりませんから、始業前や昼休み、放課後などに面談を繰り返して行っています。また、学習方法が分からないという生徒も少なくありません。そのような生徒への指導で私が心掛けているのは、生徒が各教科でどのような指導を受けているのかを把握することです。先生方がそれぞれの授業でどのような点を大事にしているのか、国公立大の個別学力試験対策の補習を生徒はどのように受けているのかなど、他教科の先生方と密にコミュニケーションを取って情報交換に努めています。

4年間勤務して感じるのは、教育はチームプレイだということです。周りの先生方と協力関係を築き、生徒がより成長できる環境を整えていくことが重要だと感じています。今後、学年の枠を超えて、実践例を共有したり、話し合う場をつくったりして、先輩方から更に多くのことを学んでいきたいと思っています。

人留学生が行うが、大学教員など3人のファシリテーターが議論を整理し、進行を助ける。生徒同士は日本語で話してもよいが、外国人留学生やファシリテーターとは全て英語で話す。

「外国人留学生は、大学で何を学びたいのか、学んだことを社会でどう生かしていきたいのかを真剣に考えています。そうした留学生の前向きな姿勢や考え方に触れることで、生徒は自分が将来どうしていきたいのかを考えるきっかけになっています。また、英語力の不足を痛感し、英語をしっかりと学ばなければと再認識する生徒もいます。受験勉強や大学の先を見据え、真の学ぶ姿勢を身に付ける、とても効果的な取り組みです」(柴岡先生)

15年度入試では高入生が初めて東京大に合格した。それも「なぜ、学ぶのか」にこだわり続けた結果だと、教師は感じている。15年度の3年生は、1学期時点で10人以上が東京大志望を表明した。それも今まではなかったことだ。

「『東京大に行きたい』という言葉が、生徒の口から自然と出るようになったのが何よりの変化です。この流れを大切に、今後は毎年2桁の東京大合格者を出し続けると共に、あらゆる学力層の生徒の志望実現を後押しすることが、本校の更なる躍進につながると考えています。我々教師がしっかりと目線を合わせ、指導力向上を図っていくことが重要になっていくと思います」(坂田先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け